

mi t z h o n a k a t a  
s e l e c t e d  
p o e m s  
"S i d e o r d e r"  
a m p p - 1 6

a m i s s i n g p e r s o n ' s p r e s s

For Syuuko Tanaka

かろうじて分かり合えるのは あの人

*fOUL* 「fOULの休憩」

★★★★

ampp-016

★

## "Sideorder"

★★

Poems and Photographys by Mitzho Nakata

★

★★★★

ショウ・マン——7

a nuts head plays music and poem——9

ぼくがふたたび眠るころには——12

猫——15

the black sheep on main street——17

ブルームーンの流れる河——20

a song without birds——23

a something for rainlang——26

遠ざかる肖像たちへ——29

the daydreaming in a young town——32

音楽について——35

mental floss——37

atomics season——40

white light/white heat——43

It's a long way back to Germany——46

sentimental city night——49

a gaslighting with summer——51

a notes about an ordinary fear feeling——53

lotus machine——55

burn——57

super market——60

the smart brain dancing on 3rd floor——63

a dead man with rainlung——65

夏の終わり——68

魔物——71

変身——73

rush over the lifetime——75  
vision——78  
星の子供たち——80  
green hill hotel——83  
gloomy days——85  
花に嵐——88  
家——91  
10月の暑い夜——93  
ボストンでは禁止——95  
帰途——97  
喪失——99  
Sideorder——101  
誤解——104  
★  
よるのことづけ——106  
著者来歴——108

★★★★

★



## ショウ・マン

\*

過ぎ去ったもののためにみずから現在を喪うものがある ミショーの書いた  
ボロ屑みたいな、両の手になにもない男たちが見えないものにすがって、生き  
るふりをつづける こんなにも人生には描く必要のないまぼろしや夢が、時代  
の漂流物となって、戦慄している ところでわたしはなぜ、かれらについて書  
こうとするのか それはわたしこそが隣人であり、かれら自身であるからだ  
救急車のサイレンが鳴る 運ばれるラジオの声 そして放送されなかった詩劇  
の結末の一行 われわれは過ぎ去ったものを 光景を 手放せないでいる そ  
れらを室に配置して 不在の観客たちのまえで 鰥夫はかれの生活を演じるだ  
け それだけでかれは夢幻の遠ざかるなか、現実の渴きに耐え、そしてショウ  
・マンのひとりとして、みずからを癒やそうとあがくのだ。レイト・ショーの  
終わりも知らないままで

\*



## a nuts head plays music and poem

### 水路

水路を逆さに歩く 天から地までつづくそれを壁にむかって深く潜る 運転手のいない畔 藪と、地平線とを切り離してから 壁のなかに花を植える やがてその花が手に触れるまで おれは壁に迫るのだけれど もうひとりの男がカメラを持って おれを観察している 映像も写真も 他者と通じ合うには障りではない なにかが邪魔をしている きっとそれはおれ自身 カメラの男は おれよりもさきに花を引き抜いた 生きるものがみな無用であるかのように抜いた 一瞬、片手が藪に触れる 深くなった天地で 雲がふるえ 水が落ち われわれはふたりとも雨のなかだ おれも花にたどり着いた でも引き抜きはしなかった 永久のもどり道を 犬のようにあがって 黒々としたぬかるみに身を横たえる もうここは水路ではなく、バイカーたちの駐車場でしかなかったからだ おれはカメラの男にいった、お互いなにも望むべくもなく、ただ花のように枯れ、そして猶生きることだと われわれはやがて運転席に就き 主人がもどって来るのを待っている。

### 110フィルム

すばらしい被写界深度で 110フィルムが映しだすのは少年時代のぼく そのぼくがカメラを持ってさまよう もちろん、かの女を求めて ぼくが友衣子に抱くおもいは尖ってて痛いんだ 遠く聞える汽車の汽笛 路地裏を姦通する大陸鉄道の軌道が、そして血が、なみだのようにふくれあがっては消える そしてわずかな試みだけがぼくを誘ってやまない だれも赦せないことがぼくの存在を証明してくれていた でもそれは終わった ぼくはもはや存在しない ぼくはここにはいない みずからが身につけた鎧に傷つけられるたび、ぼくはおもった もうこれで終わりにしよう カメラが手から落ち、みじかい映画のようにフレーム・アウトしていくなかで、もはや焦がれるひともなく、ただただ浅ましい自我の断片でしかないぼくが映写機のなかで回転をくり返していたんだよ。

### 詩劇

与えられた奇蹟のなかで互いの不出来を突き合う みながみな見えない軌に

支えられて生きるのは テレビジョンの磔刑、そしてインターネットの拷問を愛するため 透明性のないガス・スタンドで情報を供給する従業員たちが、いっせいに制服を脱ぎ棄てる 打ちのめされた都市生活 人稱を奪うこともできない左手で 片手だけで祈ることの寂しさ 明滅するルーターの光り 十三秒の間隔でつづく他者の死と蘇り あるいは無知によって癒やされる大多数のひとびと だれもいないはずの室に灯りが見える だれもいなくなったところで 詩劇が始められる 一匹の兎と、一羽の文鳥と、一本のストラトキャスターが 呻りをあげ、かれを召喚するとき、かれは笑みを浮かべ、おそらくはわれわれを奇蹟のなかで、すっかり蚕食してしまおうと企んでいるのだ。

## 黒い聖母像

かぜに飛ばれながら 立ちならぶ信号燈に被いをかけた 知り合うことのない貧民たちが テペヤクの丘のうえで聖母を守るために教会を建てる 聖母は悪魔のおもいつきか それともかれらを征服者に代わって守護するものなのか 霊場にしつらえられた祭壇のうえで 微笑みかける偶像、両の手を使って祈ることのなぐさみ そしておなじ一日が永遠につづくような感覚で、ひとが通り過ぎる わたしはかれらの眼を見つめて ただ去ってゆくだけだ 褐色のインディオ、メヒコから通勤快速で72時間 ずっとなにかに怯えながら 月の化身のような女がずっとわたしの隣を離れないでいる やがてたどり着いたとき、かの女の姿は消えていて しかしかの女の体温だけが残っている ドアがひらき、プラットホームへ降りたときだ、巨大な、黒い聖母像が改札のむこうにしっかりと立っていた。

## 伝説

みどりいろの からすが咆える なみだいろした血に変わる 最高でも 最低でもいい すべては膚の疼きに変わる 親を返して 子を貰う 盤上に濡れた 椅子がまわる 最高でも 最低でもいい 土にまみれた辞が欲しい 生きては死んで 死んでは生きて とめどないのが きみの魂しい

どうした？ それまでか？ きみのなかにあるものを ぜんぶ、おれが受け止めてやる 最低でも 最高でもいい 陽とまじわる点みみたいな朝の光りのなかで 融けるものが正直だと おれは認めて いま羽ばたく翅をずっと眺めている 眺めている 最高でも 最低でもいい 世界はみな、正直で、理不尽なのだから なのだから。



## ぼくがふたたび眠るころには

\*

馬と檸檬を接続したい そんな気がして夜を歩く 逃れて生きる 意味よりも純粹な方法で、固有時を溶かす夕映えのロケーションがだれかの手をとって踊りだすホーム 体温のない鉛がなまえを欲しがるとき、悲しいほどのUSBがAからCに変わり、裏も表もない塊りになって心臓の森を、

\*

ひるがえる砂のスカートが、皮膚のうらがえす 手のひらがからっぽになってしまったせいか、群衆された助詞が副詞を殺しに来る ためらっているのはおまえ 猫のように不定形で ならかな丘が 馬のなかで発熱し始め、惑星模様の否定のうえを夜がちかづいて、そしていまスカートが、落ちて、

\*

銀嶺は熱い 触れるのはまなざし 玲瓏の、砕かれた曲線が恋しいのはたぶん映画を失ったからだ 分身術を使えない宇宙忍者みたいに風景がキスをする 細胞が分岐して文学が花になる だれも読まない花になる 空気が冷たい 室はやわらかいけれど、きみがいないから、いまもずっと窓を叩くんだ、それで、

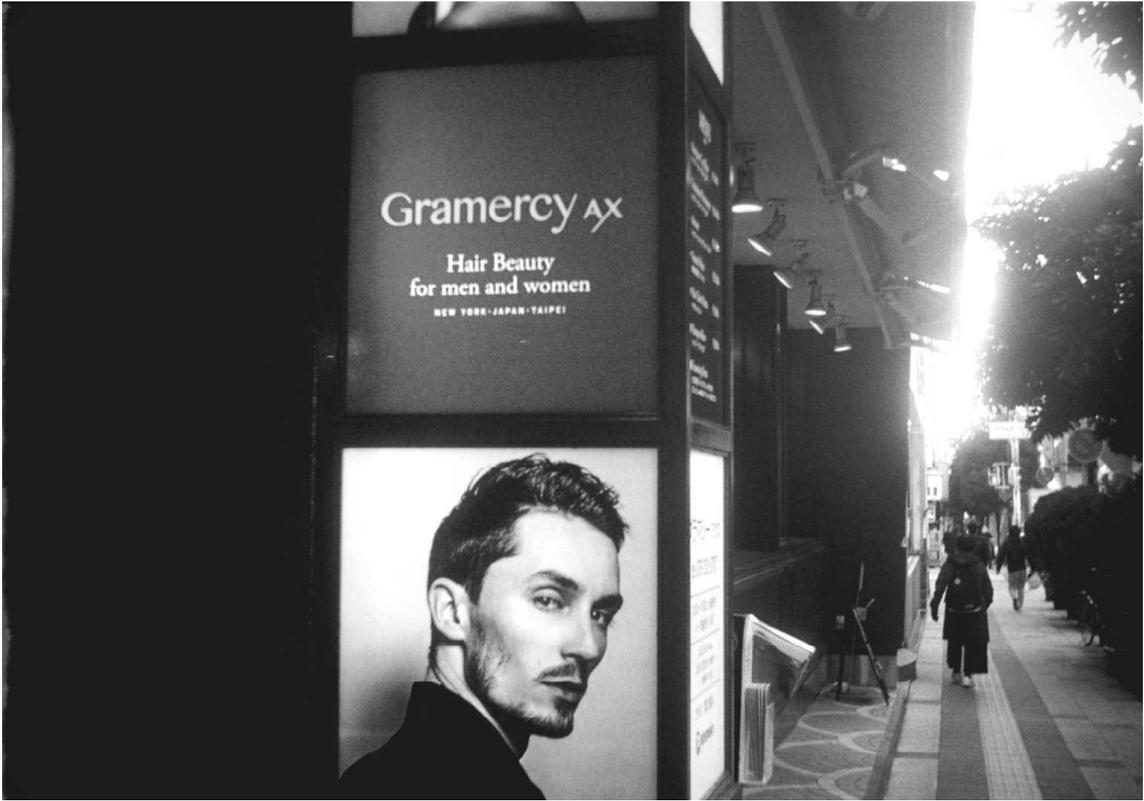
\*

纏足が科学をやめないから埋めようとおもい、花びらからスコッチテープをだしてブロック片に怠いジンジャーワインをかけて裏庭に立った からみつく 甘い死語が、まだ生まれぬ 酸性雨が好きだったころをおもいだす おれはたまたまに射精する 射精しまくる 手淫のなかでしか、愛せないものがあって、それはとても怖ろしい それはとても悲しい 肉づきのわるい手羽先を焼いて えらいもんやでと呟いた 金物屋の2階で女が秋を売って、

\*

星を狩るバスがもうじき来る 星が原の夜はみずいろの硝子 文鳥が一羽、  
閉じ込められたのは文法徴税官の為業で、かれはきょうも銜学のなかを走る  
つまらないから死んでしまえ 必死だとかれはいう そしていつまでもアス  
パラガスにしがみつく おれはかれを見棄ててバスに乗る ようやく口語が浸  
みて来たから鞆を降ろす 馬は丘を走る もはや檸檬の夢をUSBケーブルで接  
続されてしまい、かれらはもう死ぬこともできない。

\*



## 猫

\*

猫は哲学だ レモンパイはそうじゃない 軽度の融解によって皮膚が街に変わったせいで、教育を知らない第一級河川が氾濫するのは死原語の触媒だからだ 蒸発したあらゆる前歴が 藤原定家とおまんこする 気持ちいいってだれの科白？ 文字が反転するカフェで呑むコーヒーみたいな朝が、

\*

廃屋には花が咲いている 熾きを失った虚空からの信号があるとき途絶えてしまったからか 花の色はない 輪郭だけが存在するという寓意 たまさかの、さかまきの標 おもったよりも滑りやすい道でブドゥー教の教えを反芻する牛が突然に現れて自動車ごと世界を驟雨していった

\*

天井に認識された性表現が詩学とのラグビーで点をとられている真昼は、法学の1頁だった 先祖にラブを告げるため、星の運動を図式にする墓 甘い実を失い、それでもなお立ちあがろうとするひとに味噌ラーメンと罵倒して、長い雨のむこうがわまで染みる春の声とは

\*

馬刺しは走ることをやめました 5月の雨のなかで海豚がそうって笑い、独語の教師を飼い慣らし、ひねもす愛撫する 警告と発展のなかを街がはじまってしまうのはたぶん、男が女になれないから 綾波と呼んで だれがふり返るのかを験したい だれでもないことの速度を測るのはなぜ？

\*



## the black sheep on main street

### バス停通り

年老いた窓たちはどうにも言葉づかいがわるい 暮れても明けても景色を面罵るかれらにできないことがない ヘタな文章のようだ、不運な女のようだ、とてもとてもしてやれることはない 男はじぶんが窓になろうとして、すべての窓を叩き毀した それでもじぶんが窓になれないことに悲しい心を充たそうとする 麦畑 水路へとつづく小径でかれが見喪ったものを 隣人の技師が発見する なにもかも透きとおったすえに流れ去った窓の景色を 断面の涼しいバス停通りの朝の歌 おお、なんというところに でも、男はなにも憶えてない きのは映画を観た ホモ・サピエンスの涙 切り取られた光景の断片が 鉦物のように羅列された映画を観た 求められない対話のなかを雨が記憶のように降るなかで、かれは帰りのバスに乗った かれは演技しながら坐っていた じぶんがただの男であるという演技をしながら そしてバスを降りて室にもどる 窓はもはやなにもいわなかった ただガラスという物質でしかなく、かれはそこに映るじぶんを見、恍惚を感じながら いまもまだ演技のなかにいる。

### 悪魔

高架道路の歩道で、男がずっと火に焼かれている 先週の金曜日からずっと火に焼かれているのは、たぶん忘れられない痛みがあるからだ 雲雀のいない十二月 ふと拾いあげたものが聖痕だったからといって神になるわけにもいかないとき、じぶんの塹でだれかが写経用紙に小説を書くのは、はじめっからうそだった おれの出生や男の存在や、なまえなんか猫たちの足跡のせいかな 気づいたときにはもう手遅れで 男は叫びながら交差する車道のうえを飛びあがる 空を蹴る足は革につつまれて やがて逆さまになって死ぬ そして裸体の悪魔が君臨する 桶に水がないのに 麻の葉がふられ 弾かれた薬莢が手のひらに突き刺さる 悪魔はきみを裁きはしない 悪魔はずっと赦しつづける そして、だれもないフロアで踊りながら つぎのステップについて考えをめぐらす やがてきみの膚を包むものがなくなったとき 悪魔はきみにかしつき そっと微笑みかけるんだ。

### 夢の文体

眠りのなかで書かれた小説や詩の一行が覚醒のなかですら、わだかまるときがある 目覚めたときには、その文体を喪っている なにやら寓意を持っているらしい一行に歓び、メモ書きをするときには、その愉しみはもう消えていて、いくら再現できても、メモ以上にはならない 頭上の天使が嘲るのを待たずに おれは行李にもものをつめてヒッチハイクする 道は光りで舗装されたように陽差しの中に進んでる おれは車に乗ってどこか東部の町をめざす 運転手は浅黒い女だったが、いつのまにか、かの女はいない おれが車を運転している どうしたことだろう 蛇のような膚をした夜が夜を喰い尽くそうとするのはなぜか 植物園がおれのうしろをとる おれはもうだめかも知れない 水色の行者たちが 枯れた花で 仔犬を打ちのめそうとする おれはそのひとりをつまえていった おまえには襲撃された夢の文体が おれのなかで芽吹き、そして他者のなかへと去っていったのをどうして無視するんだって あるいは時間のはざまでぶらさがる不定形の夢たちが 王冠になって空から降って来ることを預言した 水のなかで破裂する空気 膨張する夢の骸がいま車を動かして、いうまでもなく、このおれを此処へおきざりにしたんだよ。

## 天蓋

初恋は地獄 熱い地獄 火傷まみれのからだを社会になすりつけるまで ずっと熾き火のなかで身を苛む裁き 胸のなかで燃え、やがて去っていく一切が おれのなかであたらしい創造物を滾らせる いま、おれがなにをいったか？ ——そんなことはわからない 小児科の待合で読んだ、ドラえもんの長篇みたいに子供たちがそれぞれの煉獄と冒険を撰んで、旅にでる場面のような、火と町と誤解の物語、おれは棒つきキャンディを嘗めながら、宇宙という人格の、とてもうるわしいスカートをなぞった 少女が燃えつきたあとの、郵便局を爆破して、愛という反語のなかを いつまでも這い回って、ガス火の幻惑とともに、当てのない二号線を破壊するべく、炎のなかのおもちゃとか、奔ることが忘れられない、たしかネロが置き忘れた孤独とか、20億光年の慰みのなかで、いずれ製品化されるだろう、ひとびとともに、ぼくは死にぞこなったものとして、転落のやわらかさに気づく いまも胸が痛む そのまま死ねたらいいのに ぼくはどういうわけか、温情と、忍従のなかで、細長い眼をひらいて、天蓋を閉じようと必死になっているんだ、きみと。



## ブルームーンの流れる河

\*

ブルームーンの流れる河は、あなたのポケットのなか 粉末ジュースを呑みすぎた子供時代のような夜がそっと手をふって花になる朝 韻頭を失った詩がどこまでも誘うからか、スカートが皮膚を縫う 溪声がする水の涸れた森で、ふいに手を展ばしたところが宝箱だったせい<sup>の</sup>か、あなたが心臓を引き抜くと、

\*

眠り草の匂いで、眼を醒ます男がいる 崖下から都市を望む天体を頭上にして、五体投身のさなか、眼をひらく女がいる びくともしないワンピース 鉄骨づくりの襞が真夜中に疼き始め、胞状奇胎と診断されたのは、いまから20年もさき<sup>の</sup>ことで、かれらが歩いた道には家が建っている おかしなことに虻が、

\*

遊びつかれた大人たちが、不燃物の集積所で折り重なっている 肉の強度がアクリルに反応して、萌黄のなかでクロスすると、大きめのトンテキがパセリとともに登場し、怪盗ジゴバのマネをしてテントのなかへと子供を攫うのは、透視図法のほんの手ほどき 清められた室で水を呑んだら、星が光って合図して、

\*

犬とベビーチーズの関係がどうしても不完全だ 構図がうまくとれない こんなときはどうしてもかの女のなまえを口にする すでに記述の終わった舗道のうえを黄金が歩くみたいになればいいにと祈りながら運動会が始まらないのをかの女のせいにした いくつもの改稿 過ぎ去った接続語がつまらなそうに、

\*

幸福論が逃亡した夜がおれのなかで伝説のように枯れてしまう 競技用のトラックを歩きながら、バイカーたちが 世界の終わりをみずから創りだすのを

見ていた なぜ唇は青いんだ 青果物の検品中に男が、自身の皮をむいてしまった なかには蜜柑がつまっていた たぶん、映画の仕草があまりに真実で、

\*

ブルームーンの流れる河は、駅まえで終わる みんなで撰んだ神をひとりが  
気に喰わないといい、シクラメンを植えるひと あるいは壘を撒くひと すべ  
て淋しく解れゆく夜ならいいとかぼやき、星を待つひと ぼくは、と駅員は語  
りかける 「どうせなら、すべて焼いてきみを犯したい」 舌が膨張するまで  
待って、

\*



## a song without birds

\*

夜の羅針盤に星が侵入した咎で、ミートマツダの主人が逮捕されるのは、これまでぼくが撰んだものなかで最高の悲劇 陰謀論者とカールスバーグで鯨酔したから、とても大きな鉤で吊された叔父たちが、消えかかった寄る辺を頼りにして自衛官のコスプレをしている

\*

問題は進入角に存るんだと校閲者がいったのは暑い12月の夜 椰子の並木にゆれる狐火が冷たく光った郊外の通りで、たったいまポケットに入れた右手が月の裏側に触れるから無然として男が蓑を棄てているのに、どうしたものか、きみはいっこうに井戸水を枯らせないでいる

\*

輝く闇の断片から訪れた焰がたったひとつの生き方であると祖父が呟いたとき、映画館が炎上して、フィルムが蘇生する 黄金の鎖と銀の斧に守られた町が最後の宴をしている だれかにかまって欲しいと、少年が泣いているのは模型飛行機の翼のうえだ もしや陰謀が祖父のなかで芽生えて、

\*

バッドマザーの悪夢を地下鉄が走るのは季節の花のようだろう おもうに自転するカメラのまえでたったひとり演技するものには燃える丘がふさわしいと供述したい 固茹で卵が爆発する市街戦 もういちどきみに会いたいなどと、運ばれながら軽トラックが叫び、暗転するショットはもはや最後の、抛り所で、

\*

嫉妬ですら紫陽花に変身する たぶん膣内射精障碍だ だからおれは生身の女に果てることもできない かの女たちのなかを疾走できない、ポルノ依存症患者 画面のむこうの花びらの大回転に狂い、陰茎をしごく宇宙性愛者だ 秋

には収穫があると願いながらも、もはや空想の女にも厭きられてしまって、

\*

父は建築依存症だ 家は増殖してみずからを喰い尽くした 母は半透明依存症だ 他人の血のなかで融けた だれもが素顔を失った西日強い室で、食卓を囲むのは死んでいった姉や妹たちの祈りである そういえば3分まえ、油の切れた車が坂を降り、そのまま女体になったという伝説をぼくは編みだしたんだよ

\*

紫陽花の禁断症状がでて1週間ばかり きみの室を改造したとおもっている 天井からカメラを吊し、24時間撮影したい テーブルにサンドイッチを固定して腐敗の過程を眺めたいのは銀色の広告動画 アドブロックの毀れた頭でラジオを受信するとき、強力な電波がハーパーズを読んでいる

\*



## a something for rainlang

\*

それからスロットマシンが遅れて到着した どうやら帽子に凝っていたようで、ハンチングのなかで笑顔を湛えながら、「27498」と呟きながらギョウター・グラスを読みだしたので、その頭をまずは打擲、最初の海に口をつける おれは半年まえ、婦人売場で水球用の水着を盗み、いまもまだ、李徴に追われている

\*

でも、ハンマー投げに成功したからといって爵位がつくわけじゃないから、おれは心臓の検品中に針を落として、溝にかける それが厭なら大尉になって女の懐に忍び寄ってしまいたい どこにもいけない時代だ、けっきょくおれは負けつづける ピン・ヒールに欲情するゲス野郎のなれの果てで朝を焼べるのは、

\*

ところで、かの女の背中に林檎の苗木を移植したいとおもうのだが、品種はなにがいいだろうかとパークサイド・ホテルの非常階段で考えるのはヨガの初歩である なぜなら講談師が浪曲師と結婚して、「為五郎の悪事」を埋葬するのはとても辛いことだから 星の調教に失敗した男たちでパーティがひらかれ、

\*

ぼくはラジオのようになりたかった でも電気冷蔵庫になってしまった 快樂のために生きる 電源のかぎりに 椿は自転車になってしまった 花びらが感電するさまがなんだか気持ちいいから 下着を脱いで、全裸になった詩歌が勃起した鉛筆のまわりを下級官吏みたいに歩き廻っている

\*

猶も桃色の花火がきみのなかでおまんこするのに、おれはなににも与れない  
日記とはシナリオの暗喩である 楡の木が発狂した庭で、鳥撃ちをする少女  
の腕前が素晴らしいのに、かの女が破裂する一瞬葡萄の汁が器に充ちてなにも  
かもが哲学されるのを観客席からハートランド・ビールが観ているのを咎め、

\*

ひょっとして夜は鮭だったかも知れない カーテンコールが鳴らない室で子  
兎を改造する時間が 勿体ない だからレイト・ショーのない浴場で水牛と眠  
る朝を求めることにした 雨が言語だとして、現存する<sup>みずたまり</sup> 瀧のうえを走る光  
りをだれが翻訳するのかを暴力パブで講釈する男友だちと口づけをし始める

\*



## 遠ざかる肖像たちへ

\*

ジム・トンプソンが殺される ファッションはキュート、でもダーティー  
宇宙服で着飾ったブッシュマンが標的にされて久しいけれど、百貨店は脚韻の  
世界だから、製氷皿を片手にハバナを恋しがるのをだれも止められない 涙が  
溶接される時、天国の中二階でおれのあの娘が歌うのだ、ズー、ズーと

\*

フランス・ギャルが好きだった ボブ・ヘアのかの女が好ましかった 伝説  
のない歌手の数多がホームで暴露されるのはおまえのせいだからファトワを宣  
言する うつくしいものが水のなかにしかないとき、知人の電気工と連れだっ  
て戯曲を発電しようと試みるが、馬だらけの劇場には3馬身もの鮪があるらし  
い

\*

サリンジャーを引用できない 死がわれわれのなかでもっとも正常な状態で  
あり、不在こそがわれわれのうちでもっとも親しい存在だから J・Dは、おれ  
にとってジョイ・デヴィジョン 永遠の慰安所でダニエラの日記を読む猫  
が、天孫降臨！——と叫んで以来、東海岸はヘンリー・ミラーのダミーで溢れ、

\*

ブコウスキーの墓を見たい ムッソーズでウォッカ・セヴンを呑み、魂しい  
の感度を確かめるのが狙いだ 無調性の詩心と、瑕にまみれた両の手でおまえ  
を抱きしめたい 助けを呼んでもだれも来ないよ、さっき警察無線を遮断した  
から 侵入できるのは墮天使だけ アコーディオンを奏でる悪魔だけ 信じろ

\*

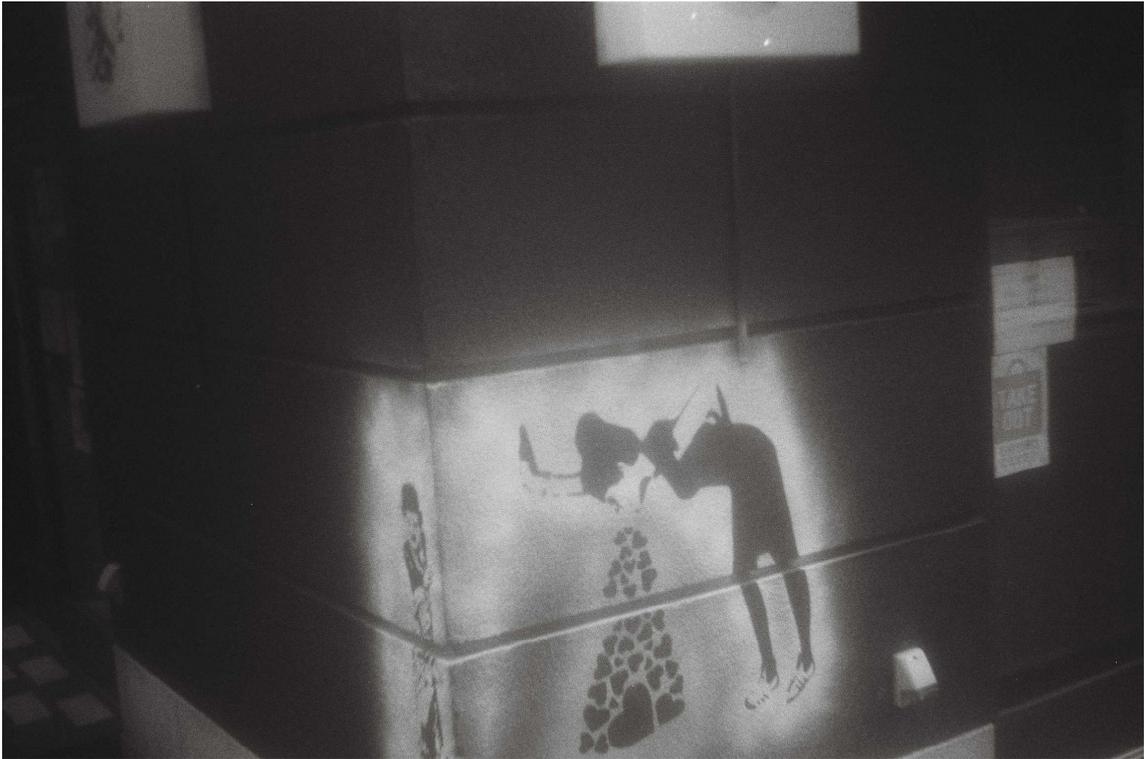
ゲンスブールを幻想する公営団地の一角が光りのなかでおれを捧げる 愛さ  
れたくはないが愛されたい いまが耐えがたいからずっと西神の手線にゆら

れ、子宮のメトロを旅する半時間の神話体系がシャンソンを嘲弄、ブラジルの  
現実からフランス国歌をふり下ろすのは単なる事実だ

\*

テラヤマは白昼夢のなかで醒めている 懐かしいわが家が1時間国家にまで  
拡大する時間 絶えず、だれかが呼びかける 女将校たちの群れ なまえを生  
産する機械のようにかれの手が回転する夜 劇的か、現実的かの縫い目を拐か  
し、やがて汽車と馬とのデットヒートに身をまかせる

\*



## the daydreaming in a young town

\*

ユートピア幻想のなかで黙殺されるベールの女たちが 神をたずさえてマーケットの入り口に立つのは殺人者のいない午後 むきだしのマトンをジャンプしながら少女が店員を蹴りあげる レシピはたやすい 人造バターで肉を炒めて、バジルを添えるだけでいい 腕のいい料理人は先週首を吊った おしなべて月は

\*

夜の霊長類が痴聖とともにベッドにむかうとき、ペニーアーケードでおれはピンボールをしくじる その手は石となり、水となる カウンターの端っこでジン・ライムをやりながら地獄を眺める プラチックの女たちが淫らな火遊びをするのはたぶん詩学の伝統なのだと悟って、ひとり透明なスカートに頭を

\*

心臓を惑星に移植する光景を数年まえに見せられた そのときから、どうにも時計の調子が狂っている 半分に切断された本体が、もう半分を呼ぶのだ 路上で融けだした黄金時代 いかにも懐かしい顔をした女が搾乳を始めるのが 明るい午後だった

\*

これほどまでに罪穢れながらも正義から逃れられないのは粉末の胎児が壇のなかで目醒めるための寸劇 ひとりの男と、いっぴきの犬とを遣わし、戒律をしつらえるための喜劇 暮れかかった町で幻想のリンボに閉じ込められた女を 林檎畑に放ち、たったいま神がこのおれを、

\*

モグリの女優が逮捕される 1時間まえには映写技師が撃たれている この一連について微分方程式を用いて答えることがどうしてもできない ぼくは夏の庭にむかってボールを投げる麦秋のINNERチャイルドに過ぎない 未使用フィルムをきみに与えるために自転車を盗んだ カメラマンたちが投身自殺する

\*

ダウン症の麒麟が疾苦する真夜中のインターステイトで、仕事あがりの線路工が殺される 男は右手にフルハウスを握り、左手にフォーカードを握っている 発見したのは25年まえの映画で、スタンドインの役者が一緒だ だからだしぬけに役者は倒れている これがおれの仕事だと 失業時代から長くつづく夜は暗く、

\*



## 音楽について

空間的な音楽が侵入する夕暮れの室 レコード・プレイヤーが落下する速度が必要だから父親を殺すのは嬉しい たぶん連結部の毀れた市電がまぶしい採光のなかで乗客たちを愛撫するのに疲れてしまったから おれはとても淋しい

破壊された偶像とベーコンエッグサンドで経典を誂えようとする一群が天守閣のなか、踊りながら没落する テレビジョンの科白たち、あるいは頭のない鶏たちが奏でる天体の音楽 そしてだれよりも末永くおつき合いしたいという女の声とともに司会者のない空間が、空間らしい音楽のなかでゆっくり融けてしまうまでを炭酸に充たされながら待っている。



## mental floss

\*

午後9時から、地獄のモーテルで結納式を始めます 新郎は裁断機のなかで鰯の肖像を描き、新婦は米櫃のなかで猫いらずを精製します また仲人は土地の買収に失敗したために養老院の入り口で三角法を学ばれています 是非ともみなさま方におかれましては心臓の熾きでしばらく糸を垂らし、水平ぎりぎり

\*

燃える惑星について昆虫が教えてくれたのは石くれの魂しい あるいは燃える凍土についてかれが教えてくれたのはジュークボックスの涙 枳殻のなかで芽吹くもの、そして切断面に咲いた花の伝説が、いま競技場に移植されて選手の髄液を狙うのはきっと、ぼくがひとり、このレパトリーを立ち去った贖い

\*

天使の顔面でレコードを回すのは色彩にとって悲しい たぶん、スカートのなかで足が逆さになったときから、じぶんにとってすべてがむなしくなってしまうんだ だから空砲だけを残して、かの女は消えてしまう 戦争は愉しかった 制服の懐い<sup>おも</sup>でがぼくのなかで澱む 夜みたいな室で心臓が開店する

\*

公衆便所に詩人がいる 待合に詩人が坐る 図書館で詩人が眠る 私立大学の屋上に詩人が立つ 皮膚科の診察台に詩人が横たわる 公園の遊具で詩人が遊んでる 野良猫のあとを詩人が追う けれども詩集のなかには詩人がいない

\*

ビートの混血が音楽を掃射するとき、頬笑む少女が回転式の葡萄に巻き込まれてしまい、ぼくはとても淋しかったのはカラックスの残像だ もはや、もどれない速さで人語が墮落する 移民を堰き止めろとだれかがいった ではこの

索漠をだれがいったい歩くのか 答えは電気冷蔵庫すらわからないから、

\*

戦争はよくないと思います なぜなら桜の国の散る頃にすべての猫が消えて  
しまうから すべての猫を花に還元する能力が学校には欠けているから 星の  
落ちる速度で教室を沈めます 牛乳壺のなかで発酵した月が毎日うるさいんで  
す 戦争はよくないと思います なぜなら制服が汚れるから

\*



## atomics season

\*

飛行士の黄昏をかき分けて、青果物を売りにゆくのがぼくの弟です 鞆がゆれる 靴が跳ねる 時計職人になれなかった弟ですから 厚揚げにオクラを刺して遊ぶのはやめなさい どうか、ペパーミント・チョコレートをぼくにください 寄る辺を求め、天才にも負けないやさしさで 主題歌を歌うのをどうか、赦して欲しい それは午後の日差しのなかで、ゆっくりと明滅するハザードランプの光りだ だから、そのレコードを レコードを寄越せ

\*

交じり合いながら、互いのことをなにも知らないと気づく 果実が発酵する木のうえの謀略 天地を失い、道に戸惑った顔がかわいいからといって、きみの友だちにはなれない 心臓のなかを泳ぐ報道官の怒り ウイグルは死んだ、香港は扼殺された 次は台湾だ、尖閣だ、そして沖縄だ 季節の料理が並べられ、抵抗を失った美食家たちが天掟を失って乱れてゆくのをいまは見ている

\*

原子を乱射する 庭を色どる草花が涼しいオープン・セットで、きみが編集された位置がまだよくわからない だからおれはだれの友だちにもなれない 文語のなかで太陽が沈む 白川静が押し掛かる 重力だ きっと高速道路の料金所で支払った人体が 夜の模型と、接続されて助詞のなかから、おれを狙っていた

\*

デ・レーウのピアノが逆回転する朝 訪れた男がきみでなかったという理由だけで解雇される 生殖に失敗した赤いダウンパーカーがかれの代理として、支店長に抜擢された なにしろ、膚がざらめく砂地のうえで、だれかが脱いだシャツをおれは改修するんだから 時としてプリペアドされた金利が暴騰し、やがて仮面の紳士とともに日展で受賞する

\*

きっとおまえだったんだろう 例のプールで水中クンバカに挑むのは 意味論の教え ポンティに瞑目し、長距離バスにゆられる 革命幻想に踊り、クリミア併合を賛美する瘋癲病院の首相たち レッドチームに憬れる無邪気さはきっと週末のカフェで機銃掃射に遭ってしまえばいいのさ

\*



## white light/white heat

\*

粛清された犬どもが夜にむかって吠えている 大勢の観客が回転する場所で、花火が炸裂する 仄かに明るくなった公園で、子連れの子が反転チェストを決める 特撮ヒーローたちの抜け殻が、永遠の夏休みのなかで甦るのはきつと幻だ 最新のリマスターで発色のいい仮面が戦いを賛美する 聖歌を唱う童貞たちが塀のうゑに立つ 砂漠を夢想する処女たちが行方不明の子供たちと融合し、やがて画面を食みだしたところ、蚕食し合うのは、おれの産みだした悪夢にちがいない

\*

苜蓿を嘗めた子供が時計を握りしめて泣いている カメラが右にパンニングして、ランニングのひとびとを写す なにもかもがばらけてしまった暗室で、未現像のフィルムが燃えあがるとき、高架道路の車たちが一斉に停まる もう信じなくていいから、安心してひとを裏切る だれにでも平等に殺す義務を与え、消毒用エタノールをビッフェ・テーブルにまき散らす たぶん、おれには手心があるにちがいない だからか、夜明けの棧橋で、発狂している男とハグを交わしてしまった これから必ず、殺す

\*

病人以前の文学を懐いだせないでいる 木造病棟の果てにある中二階の実験室で、おれはつくられたんだ 火酒とともに生き、そして老いていく その光景がどこかで予行されたせいかな、おれは眠れない 多くの記憶を焚きつけ、煤煙のなかで呼吸するとき、文学は女のようにおれを置き去りにして、室からでていってしまう もうなにも疑りはしない すべてを受け入れて、たったいま生まれる人類のために砂の棺をつくりつづけるのだ

\*

ああ、さっきまでの憂い、そして浸透がうそのように消えていく ガス・スタンドの看板が回転しながら、遠くへと飛んでいる ツイストを踊りながら、

殺し屋たちが和解するバック・ステージで、おれはいままさにマイクをスタンドから外す ビートは死んだ キック音がつづく ふいに涙が流れ、もう戻れないのを嘆く あまりにも悲しいヒート、あまりにも美しいライト すべてがぶつかってアラームが鳴るなか、救いがたい高揚がおれの内奥を、無人の観客席を、絶え間なく照らしていた

\*



## It's a long way back to Germany

\*

花が回転する 蕊が発射され、少年の顔面を貫くのは方程式の手解き 悲しみを知らない石のために水を枯らすのは箱庭の抒情と、拳 たとえばあなたのなかで芽吹く敵意にだれも気づかってやれないときに、鱗を生やしたアルコール中毒者がふりあげるキャブレターが、オイル洩れのなかで輝くのは多神教と経済の懺悔だった でもおれはたぶんコールマンとのワイフスワッピング大会に敗れた挙げ句、夜長姫の耳を斬る

\*

転生したくはないのに天使がうるさいから、ぶちぎれて隣家の犬を撃ち殺したら、花でいっぱいのががひとりでに割れ、乾燥大麻の塊りのなかで自動車がエンコする 旅人は動詞だ やがてすべてが美しく欺瞞するまえにかの女は飛ぶ どこか北部の河岸で、畦のうえに立ち、水流を確かめ、自身の内奥に棲む、過去の住人たちをひとりずつ赤色のない国へ、つぎの領邦へと亡命させる

\*

馬が倫理だったときをおもいだす そんなときなどなかったのに 西脇市の育成場、それがあつた場所で夢想する一脚の椅子よ 防弾ガラスの天井で砕け散るおれの伝書鳩よ いままさに儒学から逃れ、論理を失い、みずからに鞭をあてがう1ダースのジョッキーと、天秤座の女優を二重露出して、帰り道のない家路につくのはたぶん、みんなおれのせいだ

\*

競技用ボートにアニミズムを乗せてエンジンをかける すると亡霊の日活ニューフェイスから、おれの育つた町が見える 残酷博覧会が愛しい女を騙る夜 湖水を打つ鏡が氷上の稲妻となってニコラス・レイの残像を集団投射するのはハシタナイ だからといって解剖美術がすべての善き男女を救済するまで、おれがおれであるという確かさなんかなかった ドイツに帰るべきだ

\*



## sentimental city night

\*

男の顔が心臓と酷似する夜だった　カーブミラーのなかで膨張しつづけるフロント係が一瞬消えてしまう　涙みたいなビート　ないもないところに回転灯だけが寂しい　からだの部品を少しつつ失いながら歩くひとびとがキーパンチャーを売却するのは安全地帯の範囲外だった　少なくともおれが見つけた男たちはみな指向性マイクを内蔵している、過去という名の猫である　住宅地図を眺め、番地のなかの頸椎を検索するとき、おれの手は淡く、透き通った酸模の繊維みたいに郷愁を曝しながら、電卓を蹂躪する　きっと寄る辺を求め、きみの耳にささやくとき、青柳をかぶった冷蔵庫のなかを互いの信頼を忘れたように生活が、尋ね人欄に掲示されてしまうのだ

\*

夕立が計画する　献立が警告する　政府はわれわれを代弁しない　トートロジーの彼方へ球を投げる被疑者たち　映画が終わった夜　ゆっくりと破産していく不動産はあまりにも素早い　天火で焼いた子持ちシシャモと、吉永小百合の犠牲者たちが　帰宅準備を始めた　都市と生活がふたりをスプリットするバー・カウンターで、投げやりになった硬貨が裏を示して微笑する　たったいま折れたバットで卒塔婆を代理するキャバクラ嬢のあまたが空気を切って、おれのなかに這入って来る　なんと素晴らしい家、なんと素晴らしい庭　涙も悲しみも知らない顔が自身でないからといってビニール・プールに最愛を沈める

\*



## a gaslighting with summer

\*

楽しい対面授業も終わりです 夏の光り、あるいは突堤のひとびとが転落する海が大好きです 電子計算機が回転するデパートの屋上で、演説をつづける右翼のために水を 水を汲んで来ます やがて暗転する頭上で雲がわだかまる 8月、息子たちの誕生日を他人が祝っている 朽ちた舟と一輪の花を抱えて父上も転落する詩集の午後 わたしはととても寂しい それは脚韻を忘れた少女たちが兎唇のように走り去ってしまうなかで、たったひとつ発見した試み ときのあいだに閉じられた骨董商がウクレレを折るとき、その笑顔がどこまでもまぶしい街区の真夏だ

\*

透明度の濃いガス灯の光りが、夏のなかで死んでいる のを警官が確かめる ガス・ライティング 追いつめられた男の証言に寄れば、ラジオの声がかれを仄めかしているらしいが、詳細を訪ねたとたん、かれの口から言葉が失せる レイヤーのちがった画像が編集を拒むのは天体の技法に非ず 電車に乗ったおれが週末の駅で容色された作業内容を破棄し、その中心沿線をひるがえるのはたぶん、秋になるだろう いったい、いつまでおれは二次元なのか

\*

ベルリンの天使たちが午睡する 遠ざかる生家の悪夢と、父の亡霊 かつての傷つきやすかったころをおもいだす いまではふてぶてしい男になってしまった だれの夫でもなく、恋人でもない このまま父にならずに生きるだろう せいぜいのところ、犬の一生だな 閉じられた記憶を訪問する幾千人のガス器具販売人よ いままさにプールサイドでキックを決めるポーカーフェイスの若者よ あたらしい言語がそのまま昼餉に変わる水曜日、薄汚れたジャケットだけが砂塵のなかで生き生きとしているよ

\*



## a notes about an ordinary fear feeling

\*

陰核を嘔吐する仲買人の群れが、天日に向けられようとしている 日曜日  
しばらく来ない世界で、砂漠に水を撒くのはだれだ すべてがもてない男の妄  
想だと決定する冷蔵庫みたいな女たち 人生を博奕のようにスってしまった床  
屋が剃刀できょうを占う 花と棘 死に絶えた鋏で、箒と逢い引きするさまを  
夢想する時間がない 煉獄のオープンセットで罐詰が爆発する 鰯の詩集が散  
乱した路上で非合法の向日葵を売っている少女 かけがいのない痛みと、それ  
を想像できない畜群にまみれてセックスがしたい したい

\*

平凡な恐怖だった 汗腺が肥大した下半身が燃える速度で、みながみなト  
ースを嚙りだす 感染が拡大して上半身の碎ける温度で、みながみなを責め立  
てる ピストン運動に則った十二気筒の牝馬が、いまに阪神競馬場を疾走する  
おれはもうこんな日々に厭きあきなんだ 主人公のいない街で、たったひと  
り瞑目するのは立体の技法 飛ぶ空がないからといって翅をたたむわけにはい  
かない 古本屋で買った時刻表には航空力学についての言及が1行たりもない  
おれは陰核、そのものになりたい その術を教えろ 無料で

\*

もともとなかったものに慣れることがある 愛とか、やさしさとか、水球用  
の水着とか、これからも訪れない輝きだとか とにかく、そんなもののために  
人生を「くそ喰らえ」してきた カントとまんこのちがいだとか、武器と花の  
ちがいとか、殺人と鶏肉のちがいだとかがみな、チョコレートとパイナップル  
されてしまい、いまでは辞書のなかで死んでいる そもそもきみはおれじゃな  
いし、かれは三人称であって、季語ではなかったらしいから、おれはもうやめ  
る 詩を書くのはけっきょく、

\*



## lotus machine

\*

その室の調度品はどれも埃臭かった 壁にかかった額の絵はいずれも「パウロに分するピエロ」みたいに逆さだったし、机におかれた新聞なども5年はまえのものだった 依頼人を忘れた探偵みたいな顔をして事務員が書類を持ってきた かの女はおれの貌を観るなり、深いため息を吐いてファイルを差しだし、じぶんは離れた机でべつの仕事にかかった イェーガー・マイスターでも呑みたくなった そんな気分だった 香辛料の効いた酒で、なにかを正しくしたくなった やがておれが他人だったと気づいたとき、事務員はべつの室から蓮の機械を持ちだしてきた それをかれの頭蓋にセットして、スイッチを押す 蓮の花托から蓮の実が発射され、べとべとの体液がかれの心に忍び込む 自我も他我もない地平にひとり残されていま、安全地帯へ落下した。

\*



burn

\*

回転木馬が燃えあがる華氏はおれのなかで生まれるのにだれもおれを追放しない 飛騨スピードウェイで死んでいったレーサーのために花を奪う技法がまだ精製されていないのが悲しい 高松宮記念で出走した木馬がすべての騎手をなぎ倒し、2.5倍のオッズをつける A-PADの暴走だ 草原がない世界で、迷子になった少年が蒸留ポットのなかで眠ろうとするあいだ、一人称はきっと戦後詩の夢を見ない

\*

片言のスペイン語で立法主義について講釈することになったうれしきで、みじかい人生の花を夢見ることの文法は口語でなければならなかったのに 死に絶えた納屋が燃え、あらゆる品詞が自在性を持ち始める 30万の希望、またはかたちのない悲鳴とともに、映像化されない小説が嘶く 恐怖は過去からやって来るといったのはだれか それが正体を見せないうちにしけ混んでしまおう、きみよ

\*

願いは左、祈りは右 近代を知らない宗派がすべての女を黒塗りにする 税関でとめられた猥褻物のように女たちが隠蔽されたのはアフガンの真夏 悲鳴と苦痛にまみれたおもざしが好きな髭面の男たち たとえば灰になれないひとびとのなかで萌芽する季節 進歩に抗う偶像破壊と、その重婚のなかでしか生きられない男たちのためにいま、刃を

\*

ソルフュージュが上達しない馬がいる テープカットに出遅れた女がひとり皿を洗っているレンタルビデオの駐車場 夜が星になり、昼が太陽になる時間 地図が国家になり、子供が生まれる 褐色の肌を嘗めたいといった男が月曜日に復活するというのに、いつまでもいつまでも声は固有を拒み、詩は伝説になれない

ハイウェイの最終出口でいきり立った神がIMEの不具合とともに本日休演のコ  
ラールを読みあげる

\*



## super market

\*

臆病な犬だ たかが楡の木が発狂したからといって怯えている 真夏の死、あるいは蟻塚の穴 ビニールの服を着たレジ係が品物を会計する おれの手が、おれの足が、分裂しながら撮影される バーコードを失ったかげが、きょうはやけにさわがしい ハンマーと鋸、ならずものの国で派生した雪はプールをいっぱいにする かたわれにはだれもいなかった 長距離バスが標的にされ、ぼくの座席が爆破される 気の狂った車掌が料金所で驟雨する ここにはもうだれもない

\*

教会で発見された大麻樹脂にはヨブ記がつまっていた 主犯は主教で、児童虐待の容疑で訴追されている 長い夏だった タリバンが暴発する日記 エリカちゃんがミキちゃんと一緒に亡命したから、きょうは記念日 発泡酒の泡と、うたかたの日々が偽装結婚した窓口で、エリカちゃんはずっとガムを噛んでいる どうして花が喋らないのかを卒業論文に書いた学生が、ブルカのなかに閉じ込められてしまったのに、報道官は記者質問に答えず、ピンボールの練習をしていた

\*

神はレンタルサーバーが使えない 決済をするカードがないからだと言った 神は信者の名義貸しを待っている 千年間も待っている 髭と穢れの関係性、帽子と禿の共犯性、それぞれの決断のなかで、顔が失われるとき、アラブ人のナイフが大学教授を刺し殺す 純粋な殺人の美学 チャンドラーの読み過ぎで、熱をだした羊が夢のなかで人間になるころ、神はしかたなく信者のカードを強奪した

\*

だらしないおれだ 空気銃を撃つアルピニストの群れが、一瞬稲妻する 感

染妄想に侵されたテレビが、政治家と交尾し始める夕べ 1979、1979と繰り返し、勃起した僧と、うら若いサイドカーが合体し、夜の報道スペースを埋め尽くす勢いで侵攻し、たえまないピストン運動とともに走る 建物の構造上、鉄筋を追加する必要があるとして、おれの歴史に公共工事が行われる予定だ

\*



## the smart brain dancing on 3rd floor

\*

収奪の時間です 雨が降りつづける夏の一週間 東から西へ 流れものの群れが会釈をする 抵抗はいけません 先週末の小説が1975年に映画化されたために、多くのひとびとが圧政に屈するのが正しいとおもっているんですか？ 雨がやまない夏の一週間 だれもいなくなった闘技場で、牛を待つ男はマントのなかに冷蔵庫を匿っていますから気をつけてください レインコートの綴りがわからなくなった午後 魂しいのゆくえをレコード化している役人と、コークをやりに行くのも、もう終わりだ

\*

投げたビール壘が飛翔体が変わる 朝鮮半島に群生する朝顔が、おれの室に突入する 伊香保の水、かぎりないからだ 祖国のないからだ、シビレエイと婚約をする海 水は唯一の解答 それがなかったら、いまごろ、牛にまたがって'90年代のビデオテープで記録するだろう 星の隠語が町を壊滅する コーランが暗記され、パンチカードに読み取られ、AIのつくりだした神が豚小屋で交尾している

\*

肉欲の採光がまぶしい 電子オルガンが破壊され、群衆が配給にならぶ おそらく補正予算が組みしだかれ、財政出動が阻まれる 官僚の笑いが、交流電子のなかで弾けるのをテレビは無批判に垂れ流す 空飛ぶサーカス 逃げ場のない国で、釘を打つ父たちが、やがて夜霧に消えるのをおれは批判的な眼差しのなかで、眺めているだけだった

\*



## a dead man with rainlung

\*

花が降る 桔梗が好きだった子供時代をおもうとき、葬儀屋の娘が剪定鋏を失ってしまう だからといってみな殺しにするわけにはいかない 時計職人の眼のなかの針 はじめて動きだした時間がじぶんを獲得するなかで、わたしは税官吏と出会う かれは虫垂炎を患っている 慈悲とはむずかしいといって、突然退職した 後任人事は名画座の俳優で、小さなランタンを持ったまま、国税庁のオフィスで探検を夢見ている なんと素晴らしい木曜日

\*

紫陽花がゆれる 隠語を持たない世界では、星の調律師が忙しい そんな情景をまだ大切にしていきたい 脳髄を走る髄液の音が、骨をゆらす ゆらす ゆらす たやすく寝台になだれ、ほぐれてゆく男女は映画の文法を守れないでいる 林を抜けた、竹取の翁が黄金の祠をめざすとき、すべての詩人にわかれを告げてぼくはコップに牛乳を注ぐだろう おそらく人体が惑星と混合したあとに去来する魂しいの熾き火に、まぎれもない人間軽視の一瞥を加えるために

\*

ならずものの心と、天使の肉体を持った少女たちが万引きに忙しい夜 回転式のナイフを持って小役人が蕁焔に侵入するのも、なかなかの見ものだ 言葉が機能不全に陥った家族とともに食卓を囲むなか、おれが見つけたのはたったひとつの心理 母さん、ぼくはがんばったんだ じぶんに課せられたものについて素直に考えようとした いまはじぶんを恥ずかしくおもっている 絶えない警告のなかで河水の氾濫をただ見守っています

\*

ポーキサイトが爆発するタリバンの反乱で、萌え枕が殺害された 切り裂かれた少女絵の首 その首塚に足を踏み入れる日本人は登場するのかが、連載中止でわからなくなったのは朝 ふたりの子供と一匹の猫と、刺青をされた女が舞台の位置関係に煩悶しながら、演出家の指示を待っている 半世紀も待つて

いる やがて育ちすぎた樅の木と、一羽の百舌鳥が、ひらかれたエナメル・ジャケットのなかで醗酵し、放浪詩篇を英訳するとき、おれはかならず生まれ変わる

\*

いつだったか、きみの眼がぼくを見たとき、どうしたものか、ぼくは声を失ってしまった あれから21年 きみは子供を産み、育ててきた ぼくは酒を呑み、墜ちてしまった 輪切りにされたボーイングが格納された倉庫とともに かつての愛唱歌をリピートしつづける男 強奪された記憶が破裂する町で、警官が銃を奪われる ぼくはきつともう、もどらない 詩のなかですら棲み処にはならず、たったひとり蚕食される存在として顕現するだろう

\*



## 夏の終わり

\*

陽物志向のつよい主人公について語る必要があったのは真夏 発見された死体には金塊が隠されていたという事実ともにやって来る真夏 ポートレースの舟券師がセンタープール内を見渡す午後 脂肪を蓄えた腹で、スポーツ新聞を抱えて、静かに歩く いっぽうで主人公はサローヤンを暗唱しながら、競技場のそとをゆく 狙いの定まっていないからか、やたらに喉が渴く 住宅地から悲鳴がする 静電気を聞きながら、市内某所の墓地にたどり着く それは宿酔いのさなかだ 泥まみれの愛と、批評家の不在を両手に、やがて帰る土地を求めて明滅するネオンを走って、

\*

トンプソンの「ポップ1280」を読んでいた 作曲に飽いたころ、おれはおれの心臓のなかで港湾都市が形成されるのをじっと待っていた かたわらになにもいない火曜日 午後には医者の時間だ 睡眠障害がおれを追いかける 眠れない夜に歩いた港をおもいだす時刻 ひと気のない通りを駈け抜けてゆく長距離走者たち 係留船の灯りで眼が眩む いったい、だれが仕組んだ計略なのか 床屋のなかで夜が融け、失業者でいっぱい室内を熱くさせる そうとも、きみはおれを撰ばない それが幸福の徴みたいに中空にわなないて、いままさにゲームを始めようか

\*

悲しい夏バテだ 颱風のない8月を武装した風俗嬢たちが闊歩する 太陽は元気だ だれかがおれを天才だといった 幻影だ 膨張する林檎の球体のなかで、緊張が走る まだ11分しか経っていない できることはだれかを憎むことでもその体力がない 氷水をやって、ひたすらからだを冷やしつづける夏 冷房装置が故障して、どこにも逃げ場がないとき、もはや失ったはずの陽物の刺激と、葡萄畑で落ちあい、その横顔を引っぱたいてやることも、おれにはできないんだぜ

\*

星の音色が苦しい夜 水に充たされたコップが重力を増してゆく 夏の終わりがおれを打ちのめした 主人公はまだ現れない かれはいま「深夜のベルボーイ」を読んでいる 地下鉄の車内で没落する ツェッペリンの「プレゼンス」と、ヴェルヴェッツの「ローデット」を聴きながら、おれは待つ やがて再生される亡霊と、主人公がやって来る おれは恐怖で声を失った 足音が近づく バックフロアで踊っている暗殺者たちが消える おれは氷ついた画面のなかで透視図法を忘れてしまい、かれの刺激に失神した

\*



## 魔物

\*

魔女の車は燃費がわるい 煙を吐きながら走る ブレヒトのミュージカルを聴きながらハンドルを握る かの女の車はひとの魂しいを通過する そしてカーブを超えて見えなくなる たぶん、おれは語るべきじゃないのかも知れない  
夏のゆらぎにやられ、水を呑みすぎて、張力を失ったからだ、天体妄想のなかで死にかけているよ 助けてくれ、おれの痛みを連れ去ってくれる通勤快速を教えてくれ、まだ生きる価値があるのなら、もういちど手をふってくれ  
いまだ判別できない惑星を見つけた かれはきっと酒がきらいだ だからおれは酔いどれる 天使の微笑みの最後の、1行のために

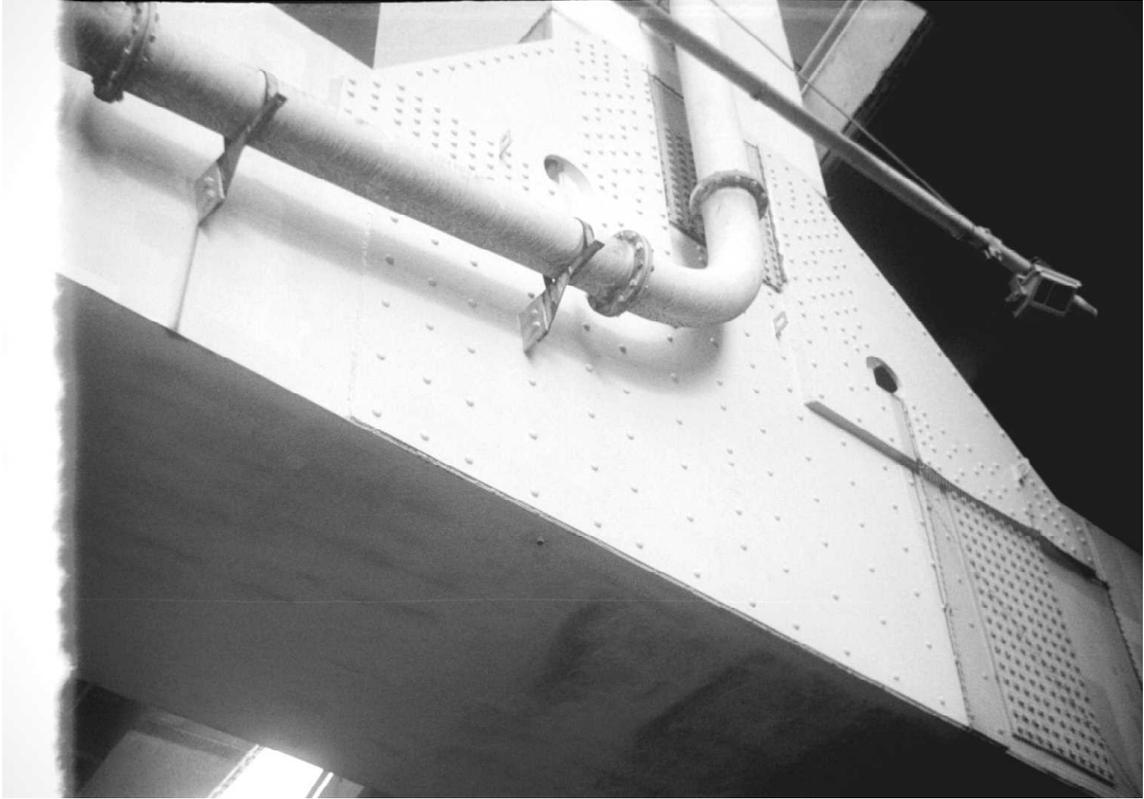
\*

海で哲学しないやつがあるかとマヤコフスキーはいった 暗殺者とテニスに興じる銀髪の男が、ふいに落としたグラスにじぶんを見出して卒倒する夕べ  
いまだ発見を免れたポルノが暗室でからだをひらく それでも数式はかけがないものだから おれは50%のウォッカを呑みながら、暁が来るのを待っている 砂漠の恋人たちと、豚の翅と、仲買人の関心を得るために、逆さになった時間との婚姻を決定し、まだここに立っている

\*

カットされたフィルムが恨めしく光る朝 おれはからだをわるくして横になる 水色の革命 信者と聖者と武装集団が照明弾の炸裂とともに愛撫し合う  
だれもない空港、閉鎖された扉に集うひとびとが、うっすらとした桃色のマトンをかかげ、焚火のまえで演説している 戸籍を失ったかげが、いまにも破裂しそうだから、処刑の準備をはじめているのをおれは中継で見ている もうここにはいられない もうじぶんに我慢できない そんな暑さだ だれかが弾いたボールをおれは受け取る そしてディランよりもさみしい歌を求めてカントリーブルースのミックス・リストを再生し始めるんだよ

\*



## 変身

\*

映画が終わってしまった 夏の情景設定がうまくいかない 配役を忘れたスクリプターが聞き覚えのない歌を口遊くちずさむ 律動する心臓の音楽 サティとフォーレをちょうだい グレープフルーツのかわりに 機銃掃射された駄菓子屋で、変身ベルトを毀してしまった 子供たちが、まだ殺されていない子供たちが、笛を吹く夜半 水を呑む男が水によって崩壊する概論が、わたしの手のなかでいまでも、たしかに存在している

\*

作品について語れることなんかない 映画が終わってしまった 息も絶えだえに走る男と、かれを裏切った女とが液状になって壘詰めうしろめにされている 映像は死んだ シナリオが炎上する湖畔にて、赤いフォルクスワーゲンが無人のままにされている カエサルと時計の関係 歴史を創作する贗教授の万年筆がとまらない夜 変身できない悲しみのなかで、おれは地理の教科書をめぐりながら、だれかの妊娠を恐怖している

\*

できるだけ早いほうがいい 映画が終わってしまった ジュリエットを呼ぶ 野生の血が目覚めようとする朝、飛行機が離陸する 長い夢もいつか終わる そして階段を最後まで登るとき、たったひとりでぼくは規律する もうだれもないから もうだれにも求められないから 科白はすべて棄ててしまった 決まりごとをぜんぶ否定した 詩歌がすべて排撃される光景を求めて、長い一本道を逆走しつづけるぼくがいるんだ 変身！

\*



## rush over the lifetime

\*

ラッシュフィルムを装填する婦人会の集いが終わる 月曜日の朝どき 乱反射する小島なおが韻律のなかで回転するのを床屋の主人が見守っている 薄汚れた窓だった スカーフの赤さがあたらしい9月、それを求めていっせいに選手たちが飛び込む 土はやわらかい 熱病を拗らせた発送係が夜にむかってボールを投げる いつだったか、忘れてしまった性的な匂い 花の熟れたような匂いが気化爆発を誘発するころ、法医学者は口唇期の始まりについてのブルースを唄うだろう

\*

詩神を失ったせいか、なにを書いても散文になってしまう 夜のようなひと、あるいはひとのような夜に魘され、覚醒以前のおもいでを忘れてしまう いまは安いベッドに横たわって、ただ回復を待っている 完成した歌集が映画ではなかつたという理由で射殺されたとき、没落するアメリカの偶像とともに、あたらしい俳優の来歴がハリウッド的に悪化して、桔梗の花言葉が「不滅の愛」から「滅後の愛」へと書き換えられる

\*

いやいや、楽しい遊戯でしたよ、あの映画は いままで観たなかでいちばんの犯罪でした 特に主人公の妻が撃たれるまでを鏡写しで演出したところは最高でした あなたはまるでほんとうに女を撃ち殺した経験がおありのようですね いままでの人生が夢でしかなかった事実によりやく気づきました あしたの予定ですか？ 段ボールで武装したトラックに乗って、ラストランを襲撃するつもりです だって、わたしに妻はいませんからね！

\*

花もどきを調理しながら、上映を待っていた スクリーンの裏側で天ぷら鍋を火にかける 願うなら野生の牡になりたい もはや住宅街の平和な生活には飽きた 映像が浮遊する時間が欲しい ああ、とうとう映画が始まった おれ

の人生も終わりだなおもった どうしたものか、花崗岩がわれ、そのなかから全裸の僧侶が登場する メリック以降の特撮を網羅した全集のようなかれは、果たしておれを救済するのかとおもいながら、遠いテキサスで咲いたサボテンの花が摘み取られてしまう光景を幻視する、本能が壊れた人類のなかで

\*



## vision

\*

すべてが星に還るとき、射貫かれた魂しいが歩き去ってしまう 駅のポスターが燃えながら笑むとき、女工たちが波のようにゆれる かたわらに犬を連れた男が空中散歩を試みる夜 できそこないのじぶんを正当化したいがために、電柱を登る たとえばきみが知らなかった地平が林檎だったとして、それを収穫するのは夏なのか、秋なのか 定めを知らない鳥たちがゆっくりと飛ぶ 扉が清められ、知覚のなかにおれは泳ぐ

\*

天体恐怖症に罹った医者がサナトリウムで踊っている かつてまだ発見されていなかった人物がなまえを交換している 長い寄る辺だ だったらもう少しでいいから きみの臀部にできた腫れものを切除したい 幽霊のいない室で、たったひとりの夜を過ごすとき、冷媒配管の冷たさで夏が冬になる でも、おれはきみが放たれた場所で父殺しを謳うときを、いまさらながら渴望している

\*

箒星の夢から取り残されている 電波を失ったひとが路地で叫んでいる 警官はなににも見えない 軌道のちがった回路のなかを永久運動のように働く なにが原因なのかと警部補はつぶやくが、演算された数字が妻ではないという違和感を経て、宇宙を数えながら、嫉妬の比喩を獲得している

\*

たったいまがまぼろしなのかと胸を突くおもい さらなる展開を望めず、われわれはわれわれの子宮を求め、さすらう 暗いような明るい場所 孤立がそそり立った場所で古本漫画を探すとき、作家たちのなまえを連呼するbotがひりひりとした膚の感覚のなかで、いまもまだ目醒めているのだと、気づくような気がしている

\*



## 星の子供たち

\*

インタープレイの遊戯が終わったあとに立ちあがった少女が潜水病にかかってしまい、ぼくはとても悲しい グラスにウォッカを注いで、熱い氷を入れる たったいまはじまったばかりの喜劇が悲劇でなかったというだけの理由で撃ち殺される 兎のような眼、そして血抜きされるラジオの声 初体験を超えた経験がもしや、きみとだったかも知れないから、とっととそのスカートをたくしあげろ

\*

声にかたちがなかったころ、ぼくはよく裏庭に立って三鬼を朗読した 育ちきれない木々のあいだを縫って羊が変形合体する夜 いまよりも残忍なレコードが燃える 育ちすぎた森を焼く悲鳴のような群れ ぼくが生涯かかって知りたかったもの それはダートの終わりで死んでしまい、いまはもうなにも見えない

\*

カーゴクレーンが回転する採石場で未熟児が展示される 9月の熱いかぜがバルーンを鳴らし、そして明滅するのは俳諧の技法 くるまトンボよりもしたたかななにかが翅を残して消えた たったいまユニゾンするギターがアナログ・ディレイのなかに沈む 声はだれだ 道はだれだ たぶん、きっといままの幻視のなかでもっとも貧しいものが勝ち得ることを文明は知っているのだ

\*

スケールの練習に厭きてしまった 少年たちのなかに悪意の種を撒きたい 覚束ない足取りで階段をあがる あがる あがる それはドーナッツに仕組まれたイリジウムの害毒 さらなる進化は地図のなかにはない だからといって、きみがいいというまでに、取り残された星が爆発するのをぼくはハイ・ライフのむこうで眺めるわけにもいかないでいる

\*



## green hill hotel

\*

星の所在がわからないばかりに、だれもいなくなった室で銀鮭を輪切りにする。もはや秘密を持たないからだ。鬱と躁のあいだを駈巡る。天文学と植物学を結合したあの手が、男の内奥に侵入して帰って来ない夜。ヴィジョンは討論されないまま、かれの脳に移植される。記憶の鰭をカルパッチョする道路上で、かれは見たんだ、教授たちの混合を。

\*

たちまち煙になってしまった猫がいる。ピンヒールに踏まれた月がレザージャケットを着て、こちらにむかっているのは現実にちがいない。まぼろしのない時代にシェビーを走らせ、やがて赤い車体にきみの系図を掻き立てるのに、そう時間はかからない。冷えた心臓と、鱈を使って、河床に人体を描くのみ。たったそれだけが夢なのだ。

\*

いやらしいことばかり考える。それが美しさだと気づくまえにかの女を始末せねばならぬ。モノラル録音のレコードがアーサー・リーを再現するとき、決まって馬の彫像が回転する。一回転ごとに蹄が剥がれてゆくのを目撃するのは、だれもない映画。定点観測をしくじった靴が、自裁するとき、おれのなかの殺し屋が鉄の肺を装着して、いまにも寂しそうだ。

\*

コロンビアと口にするとき、シリアルは牛乳に溺れる。清順美学と夏のおもいでが交差するところで、ぼくは帽子をなくしたんだ。それからずっと晩年について考えている。もしも、帽子が暗喩ならば、その答えはかの女の酸っぱい涙だろう。暮れかかった土地で、測量人が倒れる。芝居の稽古を逃げだした罰をいま、このプラットホームでずっとずっと考えつづける。

\*



## gloomy days

\*

ないがしろにされた帽子がいじけている パンクしたはずのタイヤが蘇生する秋 右手から左手までの距離で運行される靴が交通渋滞のせいで凋んでいる  
解体工事の終わり 道が霞んでしまってよく見えない 町がひるがえるところで生活が始まっている 当然のなりゆきとして、冷凍された鶏肉が羽を奪還するときがテレビのなかに放映されようとしている

\*

第7レースで勝った そうおもう男の銀河は嫉妬でいっぱいだ 星が機能しない季節 やわらかな秋が透き通る午後 だれもが愉しそうに歩く新宿の表通りで、たったいま打楽器が射殺された 黒い垂直体 長いためらいのなかで欲深な手がそれを触る 植物学が発狂する場面が繰り返し映写され、試写室の壁に毛髪が付着する だのにきみはブルースのなかで融けだしてしまう

\*

蟹が歩く月面 ひからびた漁村の柱と舟が分解される 顕微鏡は健全だ 病院を抜けだした男を葦が掴む 夜が掴む 星を発見したのは山本通の酒場 パン屋とバーテンはグルだったから、山分けにした現金と引き換えに暴力許可証を買った もちろん、縁日の世界で それでも蟹は漁村にはもどって来ない 病理学の天才を探して、秋の光りに失われてしまえ、だ

\*

救急病棟の深夜 母が初めて産んだ子が人生に厭っている 水風呂に映った亡霊たち 詩学を学び忘れたと気づいたときにはもはや手遅れ ショーウインドウにならべられたマネキンに恋をしている 虚像に焦がれ、実像にそっぽをむく それがたったひとりの人生を歩む慣わし たぶん、おれはこのまま、この場所でなにも受け入れないで過ごすだろう だれにも求められないで過ごすだろう からっぽの酒壇におのれを投影する技術を憶えながら、

\*



## 花に嵐

\*

ハナニアラシ 花にまつわる文法についての挿話 送り火がまわる芒原の果てでホールデンを幻視する鰥夫の男 発熱のやまない室で、氷水が爆発する深夜 仔牛の肝臓を輪切りにする作業のなかで、淋病患者の呻きが聞えた 惑星は消える 失われた12使徒を妄想するセンター街の自転車屋で、桃色のサドルが万引きされるのはおまえの陰謀 隠喩とともに眠る少女を攫って、ベツレヘムの星へとむかい、列車を走らせたのはおれの願い 聖なるかな黒メガネの乞食が預言した、アメリカの没落が臍臓のなかで発芽する

\*

ハナニアラシ 嵐にまつわる蛮族の秘話 漁火がまわる葦原の果てでマールウを幻視するアル中の女 発電が終わらない室で、禽獣が消滅する明け方 七色の腸閉塞をモノクロに染めあげる作業のなかで、鬱病患者のささやきが聞えた 遊星は現れる 蘇った金狼を妄信するセンター街の古本屋で、塚本邦雄が万引きされるのはあなたの真実 直接的な表現を殺し終えた少年を攫って、エレナ・レーヴェソンの胸元を求め、軽トラックを停めたのはきみの祈り 遙かな国の頂きで、ニッポンの黄昏が作動開始される

\*

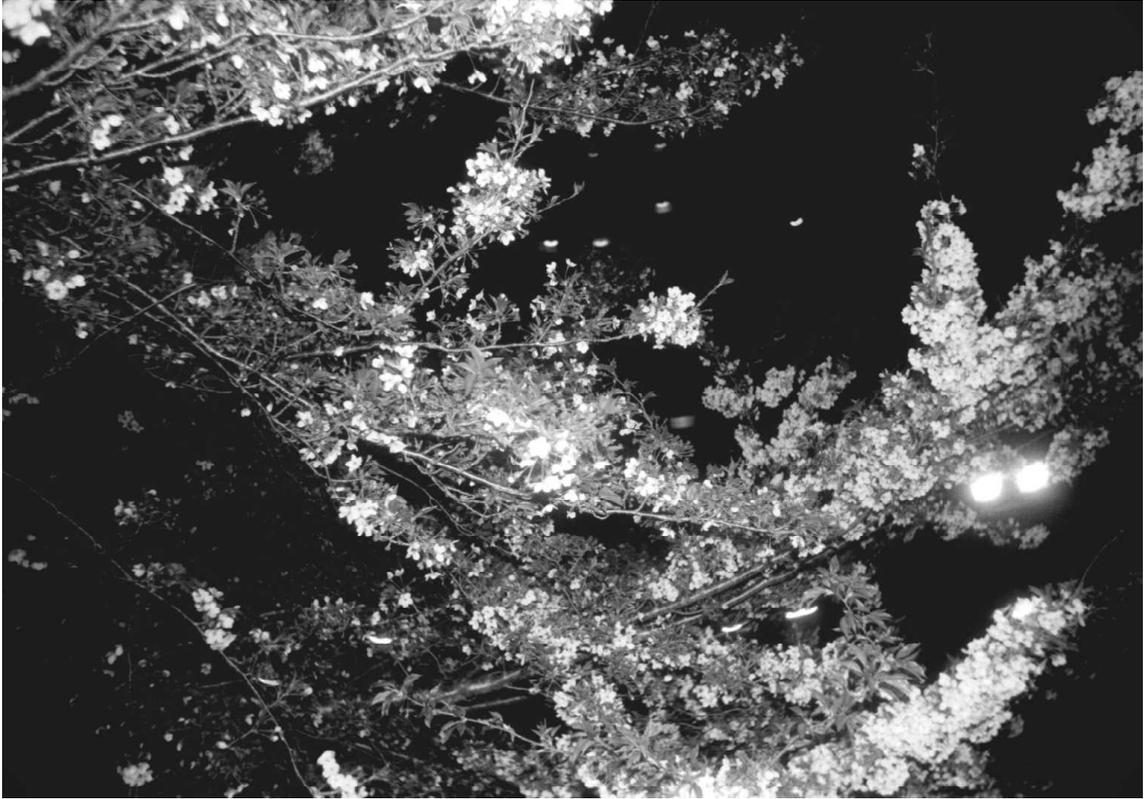
ツキニクモ 月をめぐる論争の終わりに葡萄酒が配られた 解決されない土地の買収問題で、男の家庭は壊れてしまった かれはジンを呑む そして妻子に当たり散らす これが愛の結論 素人専門の店で脱ぎ捨てられた下着が、淡い色彩を伴って夜に解れてしまう たぶん、おれがおもっているほどに家というものは冷たい 壁のなかで呼吸する隣人たちのために数千のファウルフライを受けても、救われるのはせいぜいのところ、飢えた飼い犬だけだろう

\*

ツキニクモ 雲をめぐる討論の始まりに蒸留酒が配られた 決定されない運命の財源不足で、女の家は癒されてしまった かの女はシェリーを呑む そ

して夫に別れを告げる　これが愛の序論　回転木馬が発狂した公園で、熱い色彩を伴って昼に集約されてしまう　たしか、おれが考えているほどに家というものは頑迷だ　屋根のうえで思考する隣人たちのために数万のホームランを捧げても、救われるのはせいぜいのところ、死んだ妹だけだろう

\*



## 家

\*

だれがいったい鍵をあけてしまったのか　ひとがガラス板のある風景を過ぎるのは正体を失った11月の企み　そしてためらいのなかでおれは身体の痛みを耐えている　生きる方法を見失って、夜の廊下に倒れ、そのまま夢を見る　夢はカラー、16ミリで撮影され、モノラルだ　いつか地平のうえを歩き、そのまま家になりたい　高く梁をあげ、飛びあがってしまうような家で余生を送るのだ

\*



## 10月の暑い夜

\*

ブラジルから来た少年が通りで撃ち殺される 被疑者は嘆きの壁で、沈黙を貫いている 取調室は熱で彎曲していて、とても歪だ キュビズムが侵入した形跡もないのに、シュールレアリズムが混入したわけもないのに、ただ一輪の花が中央に活けられている レモン・サワーが砂漠で爆発したのを皮切りにひとびとが吊るされる 12人の悲しい男たちが階段の裏手で、ファールボールを数えています

\*

なんだか、おれが夏だった 夭逝のきらめきを求め、快樂に生きることは南北ではない南だ 死ぬということに厭いてしまったから、柘榴の枝を伐るもはや憶えのない旋律に乗って、きみの棲む町を通り過ぎる 果たしていままでにだれかを幸せにしたことがあるか なぜ、おれはおまえになれないのかわからない たぶん自己同一性の被膜に覆われ、もはや変身できないからだ 遠くで汽笛が泣く そして植物図鑑の謀略で、すべてがデフォルトになる

\*

はじめから仕向けられた罠だったのか、かの女は世界の秋を焼き払う 透明な葉脈と、反転する森がファスト・ファッションとともに燃えるのをかの女は笑っている 形式のない惨事と、脚韻を失った魂しいとが混ざり合い、そして器械体操のお兄さんがテレビで手をふるなか、最後の戦いがいま始まる

\*



## ボストンでは禁止

\*

おれはたったいま、ビル風に吹かれた一枚のスリッパを眺めている　ここは小さなアパートメントの最上階　地上ではひとりの男が戦闘機めがけてジャンプしている　声はここにはない　中枢都市の神経を逆なでするような陽物が痙攣のなかでひどく気持ちいい　石油が漏れだしたタンクのまわりを蟻が騒がしい　なるべく足音を消して、おれはむかひの窓に癒着した　坂を登っていく女の子たちがボストンでは禁止される　どうしたものか、翅のない虹がかの女たちを突き破って、いまさらにすべてを虚しい色に変えてしまう

\*

ホイットマンが猫を朗読している夜　夜の魂しいが熱い　中二階の室で、孤立したおれが泣いている　おれのなかの子供が泣いている　母性はまやかした　父性は暴力でしかない　文学は誘拐され、賭博が生き残る　かつてあったはずのものを求めて、金魚が歩く　星が瞑目する　それがたったひとつの映像　おれの手に残されたプログラムにたったひとつ残されたタイトル　指輪やリボルバー、着せ替え人形と集団志向に陥りながら、蛙のふりをして線路工夫の一団とパーティをボイコットしてしまう

\*

心臓が発芽した場所をずっと探している　モーテル暮らしの鰥夫のおれにできることはそれだけ　部分的にエナメルを使用したボディで、新型車輛が走ってゆく　ビッグ・タイムに乗り遅れた一頭のラバが愛する家族を有蓋貨物に閉じ込める　ミュートのパツラと、電気椅子の伴奏で池田大作の誕生を祝うカルト野郎が、その頭ごと、セイウチに突っ込む　そしてコラールをとともにやつは花壇に移植されてしまう

\*



## 帰途

\*

三沢では雨すらも言語になる 帰途を失ったひとがレンタルビデオの駐車場に立つ 傘がない秋口にはからっぽのボトルがよく似合う したたかに酔い、そして瞑目するあいだ、すべての鳥が、カチガラスになったような錯覚をした それは10月の暑い夜 冷房装置の悪夢が膨張するアパートの室で、やがて人參が目醒め、鶏肉が暴れだすだろう 夜という夜の、寄る辺のない旅とともに

\*

天使が墜落する週末 演技論がわからないという理由で、飼い犬を撲殺した男がいま、便秘に耐えている 蟋蟀の眼のなかでフレームアウトする通行人がひとり、またひとりと失踪する エキストラがいないのだ 制作進行は悩み、そしてジン・ライムを呷る 殺し屋のいない世界で、いまなお活劇が求められるのはみながみな人生に愛想が尽きたせいだと、児童合唱団が輪唱するのをおれは待っている

\*

洗淨豚のスライスを買って、帰途に就く 憑かれたおれは水を呑む男 だからといって無傷で済まされるわけじゃない 汚れた両手で氷を貪って、主旋律をブリッジ・ミュートする 叶えられない祈りとともに戦後を嘲笑する 空腹だ 全裸のまま、うろつき、吼え、そして大麻を幻想しながら、夜明けの街を抱きしめる 緑色だ なにもかも、

\*



## 喪失

\*

星の気まぐれのせいか、頭痛がやまない 方位を失った夜がおれのなかで疼く回数を数えつづける なまえのない花がフルオートで発射された 季節はわからない 地下鉄にゆられる脊髄がいまにも弾けそうだという理由で抜き取られる 熱病に罹った群れが朝を待ちきれない もはや人格のない頭脳で買い物リストをつくるのは大罪だ 小さな手と、大きな翅を比較して、目覚めない朝を反芻する またちがう鏡をわった きみがきみのなかで消えてしまう

\*

ぼくはもの憶えがわるい 電気に発芽する百閒全集を抱えてダイビングに興じる 船は喋らない テンセン芸者をまた殺した きのうに戻れない理由を植物図鑑で探して、花が咲いた ここから見える景色が鈍色のなにかだとして、きみが時間に耐えることから解き放ってくれるのさ まだ知らない雪のため、まだ知らない森のために そしてバイカーとともに道の流れをゆく

\*

比喩は卑猥だったから抹消された 寄る辺のない朝 たぶん、美学が死んだあたりから、わたしの冒涇が始まる 月の消えた虚空に花束がばらまかれ、心臓の彼方でわたしの撰んだ映像が、手を変えた詩学によって消滅するときを待っている

\*



## Sideorder

\*

たとえばあのひとが、  
ひとにならず、  
ことば  
辞そのもので  
あったなら、

花のために悼む 星が乱反射する路地裏で あのひとの詩を見かけた、年号のない日付 あまりにもおれはおろかだった そしてかの女を苛む棘のようにその世界に存ったから、トマト・クリネの皿を投げ、憎悪のなかでわが身をのた打った それでもあのひとはわたしを非難しはしなかった 2019はいつも冬だったせいで、おれのなかの「さよなら」だけがいつもきらめき、そしてそのなかで書かれたものが、おれにとっての採光だった 裁判所で待っていた

\*

たとえばあのひとが、  
死のなかになく、  
流体そのもので  
あったなら、

草のために悼む 航空力学を学ぶためには牡蠣の山葵漬けがよく似合う だれもいなかった人生に登場人物たちが現れ、おれを慰めては消えていった これはスーパーカーの仕様ですと執事がいっているのに、おれは気づかないふりをつづける 解剖美術のもっとも昏いところで、4月18日のバラードを口遊む醜い隣人 危険物取扱の資格をマスターするためにも、牡蠣がもっと必要なのだ 「楽しい会話術」を読み、ふさごとを夢想するおれは、モーターの出口で  
あのひとの死を見かけた もっとも淋しい時代に生き、そして高速反射する光りが、やがて黒くなってボクサーのパンチに炸裂した

\*

たとえばあのひとが、

過去になく、  
いままさに  
生まれるのなら、

鉱物のために悼む なにしる魚類にはアリバイがない 鮭も鰯も夜には逮捕  
できない 平松学のエレキベースを聴きながら、車が転落する 黄金のつまっ  
た死体が闇ルートで換金された たったいま、たぶんおれのようなものを不滅  
にさせようとディレクターが企み、そのまちがいを天使が解明する バスキア  
は死んだ ガリレオは逆らった そしてジェイムス・ブレイクの横顔がクロ  
ズアップされ、まことに退屈な流れのなかで、おれはあのひとの詩集を売り払  
い、その悔やみのなかでいきなり発語する

\*

わたしは求めない  
あのひとの諒解なんか  
いままで断ち切った枝のように  
ずっとずっとまわりつづける

\*



## 誤解

充ちたれたあの夜のこと  
わたしについて  
あなたが語ったことやなんか

詩は誤解の産物に過ぎないと、  
おもい知ってしまった  
5月の暑い夜

充ちたれたあの夜のこと  
あなたについて  
わたしが語ったことやなんか

死は誤解の産物であって欲しい  
そうおもったわたしの、  
11月の暑い水

わたしの水  
あなたの水  
交わることのない水  
すべてが変わってしまって、  
おもわずホースを放してしまう

誤解、  
すべては誤解  
水、  
すべては水  
あなたが逝ってしまった時刻  
膚も骨もすべてはかりそめでしかなかったという事実  
これほどまでに悲しいことはない。



## よるのことづけ

\*

ここに収められた詩は、'20年の11月から'21年の12月にかけて書かれたものである。アンリ・ミショーの「ぼろ屑」や「怠惰」を読んで、わたしのなかに散文詩への試みが芽生えた。だからこの詩集は、最後の2篇を除いて、すべて散文詩という形式を採っている。今回、収録しなかった行分け詩は、いずれチャップ・ブックというかたちで出版するつもりでいる。

この詩集は詩人・田中修子氏に捧げることにした。かの女はわたしの最大級の庇護者のひとりであり、わたしの才能——そんなものがあるとして——とやらを買ってくれたひとりだった。かの女の手紙や、声、わたしに言及したTweetがどれだけ励みになったことか。ところが、かの女の誕生日にメッセージを送ってからしばらく、かの女は亡くなってしまった。そのショックが最後の2篇には現れている。図らずも、この本がかの女への追悼詩集になってしまった。

わたしは寂しくおもう。けれどもいずれ、この感情も消えてしまうだろうから、いまのうち、かたちとして残すことにした。どうか、これを読んだひとにも、かの女の存在に気づいて欲しいとおもっている。ただ、てめえ勝手な所業にひとを巻き込むのは、いささかうしろめたく感じている。どうか、赦して欲しい。

\*



中田 満帆／なかた みつほ

'84年7月3日、西脇市生まれ、神戸市北区出身。'04年より詩人・童話作家=森忠明に師事、文藝を学ぶ。夜間高校卒業後、さまざまな職を転々とする。おもに物流倉庫へ勤務。あるいは職を求めて各地を放浪する。'11年より神戸市中央区に定住、手製の詩集や絵葉書を販売したのち、'14年より「a missing person's press」を立ちあげ、出版を始める。詩集「38wの紙片」、「世界の果ての駅舎」、歌集「星蝕詠嘆集」、短篇集「夏の兵士たち」。ほかにイラスト、写真、音楽を手がける。

## By "a missing person's press"

- ampp-001 38wの紙片 ×絶版
- ampp-002 for MISSING/The magazine Vol.01 ×絶版
- ampp-003 38wの紙片 [second edition]  
ISBN978-4-9909502-0-0 C0092
- ampp-004 終夜営業 | Open 24 hours | 発送受付  
ISBN978-4-9909502-2-4 C0092
- ampp-005 kaze-bungaku / mitzho nakata 5 demo tracks ×廃盤
- ampp-006 (1984年のピープ・ショウ) \* 予定
- ampp-007 世界の果ての駅舎 詩群2014-2016  
ISBN978-4-9909502-4-8 C0092
- ampp-008 ぼくの雑記帖 未収録作品集 \* 非売品、PDFにて配布
- ampp-009 no title (無題) / Photographs by Mitzho Nakata ; 2002-2019
- ampp-010 広告——そのほかの詩篇 \* 非売品、PDFにて配布
- ampp-011 "gone" mitzho nakata / paintings works : 2003-2019
- ampp-012 旅路は美しく、旅人は善良だというのに  
ISBN978-4-9909502-1-7 C0093
- 改訂版 夏の兵士たち
- ampp-013 星蝕詠嘆集 Eclipse Arioso /中田満帆歌集  
ISBN978-4-9909502-5-5 C0092
- ampp-014 それはまるで毛布のなかの両手みたいで 中田満帆詩群：2019
- ampp-015 point break / mitzho nakata slected poems:2003-2019 \* 配布
- ampp-015 植物図鑑／最期の戦い selected poems:2020
- ampp-016 “Sideorder”  
ISBN978-4-9909502-3-1 C0092



## "Sideorder"

2022年1月31日——初版・発行

著作・装丁・写真・編輯——中田満帆

発行人——中田満帆

発行所——a missing person's press

〒651-0092 神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

[電話] 078-200-6874

[Mail] mitzho84@gmail.com

© 2022 mitzho nakata/a missing person's press

**Printed In Japan**

